

自ら問い、それが文学の言葉

小説、翻訳、音楽

表現の違いを探る

「ただようまなびや文学の学校」岩手分校

「言葉で表現したい」をテーマに掲げた「ただようまなびや文学の学校」の岩手分校(実行委主催)が10月25、26の両日、紫波町図書館で開かれた。福島県出身の小説家古川日出男さんが代表となり、2013年8月に福島県郡山市に開校した校舎を持たない「まなびや」。今回初めての分校が岩手に開設され、小説家、翻訳家、音楽家5人によるワークショップや鼎談などが繰り広げられた。講師との距離の近さも魅力で、各コマで受講者との活発なやりとりがあった。

「答えは普通一つだが、生きてくると小説の違いとして、」お客さんきて思うのは正解は一つではないが踊りだせばテンポも変わり、音というところ。一人ひとりがいかに楽は場をつくるもの」という大友な答えを見つけてほしい。問いに、小説は一人で書いて反答するだけでなく、自分から問い、応が分らないまま終わらせる」を見つけた。そのときに出てくるの古川さん。クラシックは作曲家が文学の言葉だと思おう。学校のものという例えに、文学はクラシックの古川さんによる開校宣言で授シックに近い」との見解を示し、言葉が始まった。

村上春樹さんと同じ作品を翻訳することを試みた柴田さん。「僕から見るとほとんど同じだけど、『全く違うものですね』と言われたい」と振り返り「翻訳は音楽で言葉はカバード」と話を向けた。演奏と録音、手書きとワープロ入。古川さんと翻訳家の柴田元幸さん、音楽家の大友良英さんによる鼎談は、異ジャンル3人が自己と苦しくて遅いんじゃないかと思いで話すスリリングな展開。音楽い、今では半分を手書きにしてい



鼎談を行った(左から)古川さん、柴田さん、大友さん。講師自身が楽しみながらテーマを深く掘り下げた

「と語った。紫波町出身の小説家野村胡堂がクラシックコードの収集家で音楽評論も手掛けた逸話には、「言葉でとれれば音楽を伝えられるか、聴けない前提での真剣さがい

いなと思」と柴田さん。古川さんは映像が残っていないダンスサーを例に「文章ですごさを感じるが、生で見たらがっかりということもある。誤解を増幅する装置が文字かもしれない」と応じた。また、大友さんは「言葉は音楽と結び付いた場合に一方に先導する術がある」と指摘。古川さん、柴田さんは、書き手として「音楽という乗り物は乗ってみたい」という立場だ。

「伝えたい」思いこそ大事

釜石出身沢村さん

ひ上げるものをじっくりと探った。



ロングホームルームで自ら翻訳したバージョンの「おおよざンナ」を披露する受講者

地元ゆかりの作家として参加した沢村さん(釜石市出身)。ワークショップでは、小説の書き方を指南した。あらかじめ受講者が提出した粗筋を基に、沢村さんが短い警察小説を取り、受講者14人が目次作りを任せて、受講者14人が文章を分け場面を象徴する言葉抜き出す作業を通じ、書かれた道しるべとする目次の意味を伝えた。

現代小説、青春小説のつもりが警察小説に変わり、受講者には戸惑いもあったが、沢村さんは「伝わりやすい文章は訓練すればできること。一番大事なのは人に伝えたいという意志。自分の世界を大切に、ぜひ作品を書き上げてほしい」と語り、花巻市の男性(46)は「目次から始めるやり方を参考にしてみたい」と話した。2日目のロングホームルーム。沢村さんは、もう一つのワークショップで小説、音楽、映画を比較して討論した経緯を紹介。小説に對する突っ込みとして「生きるために必要なのは、という究極の問いが出された際、東日本大震災で被災した人が「直後は食べ物や暖かいたが優先だったが、時間がたつにつれ芸術がなくてよいものではない」と思い当たり、小説って素晴らしいと感じた」と語り、語りを紹介。「同感動した」と語り、「私にとってのまなびやだった」と振り返った。



岩手分校について

「ワークショップの盛り上がりから素晴らしいと感じました」と岩手分校を振り返った古川さん

どう展開

川上さんワークショップ

1行目から



受講者が1人1行ずつ書く「合作」に取り組んだ川上さんのワークショップ

「書き出しの名作」を参考に、最初の一行を考えるワークショップを初日に行った川上弘美さん。2日目のテーマは「小説のひろげかた」。自身は連想ゲームのように短編を書き出すこともあるという、ばつと目に入ったものを「異物」として放り込む手法も有効と紹介。向田邦子の小説「胡蝶の部屋」を教材に、受講者14人が1行ずつ書き進んだ。「前の文章を生かすこと」がルール。原作の1行目「結婚は無事に終わった」から、1人目が「私の心にはまだただかまがりがある」と続いていくと、書きながらいろいろなことを考えられる」とし、1000通りの展開が可能と指摘した。ワークショップでは他にも用意された1行目から好きな作品を選び、個々に展開する作業を実施。村上春樹さんの「かえるくん、東京を救う」を選んだ受講者が多く、川上さんは「この書き出しに反応できたのは、言葉の細かいところ」に敏感になっているから、これからは敏感でいて、自分で書いたものを元の話と比べてみてほしい」と話した。

かすかな声にも光を

長古川さん

「ワークショップの盛り上がりから素晴らしいと感じました」と岩手分校を振り返った古川さん

今回の分校には、紫波町、盛岡市など県内を中心に各地から約180人が参加した。2日間ともロングホームルームで各講師が授業を振り返ってまとめると、震災以降の日々を語るために、一人ひとりが「自分の言葉」を発信する必要があると考へ、まなびやを開設した古川さん。ただようまなびや宣言には「物語の言葉、歌う言葉、外国語から訳される言葉、社会の成り立ちを分析しよう」と試みる言葉、そうした全部が『あなたの文学』なのです」と寄せている。

ただようまなびや文学の学校

今年秋のテーマは「おおよざンナ」

http://www.tadayomana-biya.com

10/25 sat・26 sun